

医療功労賞 県受賞者紹介

中



「県内の救急医療を充実させたい」と語る神山さん（徳島市の亀井病院で）

救急態勢充実へ日々勉強

亀井病院院長
こうやま ありふみ
 神山有史さん 65

徳島赤十字病院（小松島市）で勤務し始めた16年前から、県内の救急医療態勢の充実を力を注いできた。救急救命士の医療行為の技能を高めるために設立された「県メディカル・コントロール体制推進協議会」の委員長も務める。救急救命士らを呼んで研修会などを実施してきた。「救急医療に携わる仲間たちの活動が認められた。その代表という思い」と謙虚に喜ぶ。

勤務医だった父の背中を見て育った。1971年に徳島大医学部を卒業。「新しい診療科。将来発展する可能性がある」と思い、麻酔科医の道を選んだ。徳大病院のほか、県立中央病院などで勤務。96年に徳島赤十字病院に移った。

救急搬送の多い同病院で、これまで以上に心肺停止の患者と接するようになった。心肺蘇生率を上げるにはどうすれば良いか。消防士が患者を搬送する際に、防組織と連携する必要があると考え、研修会を開催し始めた。

救急救命士との交流を始めて「救急患者は基本的に管内の病院に搬送する」とを知った。だが、「重症患者は管内にこだわらず、扱える病院に搬送すべき」との思いを強く持った。

2003年に設立された同協議会の委員として、その態勢を整えた。救急救命士が患者を搬送する際に、

「実感している」と実感している。同病院を昨年3月で退職し、同年4月からは亀井病院（徳島市）の院長を務める。今も、手術にも立ち会い、入院患者の回診も行う。「今もまだ、日々勉強です」と謙遜する。日本ではまだあまり知られていない、終末期がん患者らの痛みを和らげる緩和医療に取り組み同病院で、40年の自分の麻酔科医としての経験が役に立つと考えている。

既往症や血圧などをチェックするリストを作成。重症と判断されれば、その患者を診ることが出来る病院に運ぶようにした。

心肺蘇生法の技術向上や、けがの初期処置などのため、様々な講習も行った。これらの講習には県内の各消防本部から参加するようになった。その結果、「消防職員全体の意識が上がっ

救急医療の現場からは少し離れたが、それでも「県内の医師のために、救急救命システムをより一層充実させていきたい」と思っている。だからこそ、若い医師たちへの期待も大きい。「幅広く、色々な患者に接してほしい。それが、救急医療のみならず、災害時の医療にも役に立つはずだ。」

（中谷圭佑）

読売新聞社主催、厚生労働省、日本テレビ放送網後援、Eーサイ協賛